

『明德記』書誌目録稿

和田 英道

初めに

応安元年・正平二十三年（一三六八）十二月、足利義満は室町幕府三代將軍職を継承した。義満は管領細川頼之の補佐を受けながら、幕府の基礎を築くことに腐心したが、初めその施策としては、守護勢力に対する妥協と牽制であった。しかし、幕府の基礎が固まると、強圧政策に転じ、強大になった守護勢力等の分裂・崩壊策を採り始める。すなわち、嘉慶の乱における土岐氏、明德の乱における山名氏、応永の乱における大内氏、永享の乱における関東管領足利氏は、義満の強圧策によって、その勢力を削減された氏族である。これらの乱のうち、明德の乱は、明德元年・元中八年（一三九一）十二月末に勃発、翌年一月一日に鎮定されたが、この乱鎮定によって室町政権の強大さが誇示されることになった。同年十月には南北朝合体が実現し、ここに永年にわたる南北朝動乱に終止符が打たれた。こうしてみると、明德の乱は、真の室町時代をもたらした結節点ともいえるべき内乱であったということができらるだろう。

この明德の乱の顛末を記録したのが、『明德記』である。本書

は、『看聞御記』応永二十三年（一四一六）七月三日の条に、「先日物語僧又被召語之。山名奥州謀叛事一部語之。有其興」とあることから、早くから語りものとして享受されていたと想像される。また、『看聞御記』永享六年（一四三四）二月九日の条には、「内裏依仰明德記三帖堺記一帖進之」とあり、このことから成立当初から三巻形態であったと思われること、また成立後すぐにある程度の流布を見たりしいことが知られる。後掲の陽明文庫蔵本の奥書は、その証左となる。

以上のことから知られるように、室町軍記中に占める『明德記』の位置は重要である。その研究の基礎として、全国に散在する『明德記』諸伝本の所在と、その書誌を以下に記す。

本稿は昭和五十二年度文部省科学研究助成金による研究成果の一部である。

『明德記』の所在

『国書総目録』（以下『総目録』と略称）に掲載される『明德記』の諸伝本は、つぎのとおりである（以下の略号のうち、写は写本、

版は版本である。所蔵者の略記は、『総目録』第一巻および第八巻記載の「図書館・文庫一覽」を参照されたい。

写内閣（江戸初期写二巻二冊）（江戸初期写一冊）（抄、軍記抜書の内）・宮書（室町時代写）・島原（上巻一冊）・鈴鹿（二冊）

・尊経（三巻二冊）・陽明（文安五写）・旧海兵

版慶長一古活字版——内閣・蓬左・大東急（中巻欠、二冊）・酒井宇吉

元和三古活字版——東大史料・茶園成賢・延岡内藤家

寛永元古活字版——東洋岩崎・栗田・大東急・小汀利得

寛永九版——（内閣本以下の伝本と「補遺編」掲載の関大本を加えた二七本省略）

刊年不明——岡山大池田・国学院（三代記の内）・彰考・丸山

・仙台伊達家

『総目録』には、この外に「新撰」と角書した『明德記』写本二部（但し実際は一部）が彰考館蔵として掲出されている。以上の記事を手がかりに、写本の方から見ていきたい。

写本のうち、内閣文庫蔵本として掲げられる「抄、軍記抜書の内」本は、『太平記』や『応仁記』などとともに、流布本から抄出されたもので、研究対象となり得ず、割愛してもよい本であろう。

「鈴鹿」文庫本は、吉田神社社家祠堂官鈴鹿義一氏旧蔵本で、その大部分の蔵書とともに、現在、大和文華館（奈良市）に所蔵される。

形態的には二冊であるが、三巻本に相当する。前田育徳会「尊経」関文庫蔵本も、二冊ながら実質は三巻本である。「旧海兵」、すなわち海軍兵学校旧蔵本は、現在、海上自衛隊第一術科学校（広島県江田島町）教育参考館に所蔵されるが、写本ではなく、寛永九年の整

版本（三巻三冊）である。本書は『承久記』・『応仁記』とともに寛永九年と十年に版行された、いわゆる「三代記」中の一つである。因みに『承久記』・『応仁記』の「旧海兵」本は、『総目録』では両書ともに「写本」の項に掲出されているが、いずれも整版本の項に移項されるべきものである。

つぎに、管見に入った写本を列挙すると、群書類従本の底本となつた神宮文庫蔵本、島原公民館蔵松平文庫本と同じ奥書を有し、兄弟関係をなすかと思われる天理図書館蔵本の二つがある。また、現存不明ながら、尊経関文庫蔵の寛永九年整版本に施された校合書入によって、その本文が復原可能な二種の本がある。以後、この二本を整版本に付加された識語に因んで、「青蓮院本」と「長福禅寺本」と呼称することにした。なお、石川県加賀市立図書館蔵聖藩文庫にも、写本（三巻三冊）が所蔵されているが、寛永九年整版本を写したものである。

つぎに、版本について見てみたい。まず、慶長十九年古活字版（以下慶長版本）のうち、酒井宇吉氏蔵本のみは未見であるが、あとの内閣文庫蔵本・蓬左文庫蔵本・大東急記念文庫蔵本の三本は、いずれも慶長十九年の刊記を有している。ただ、内閣本は三巻一冊であるが、本来は三冊形態であったものが、一冊に合綴されたものである。その点、蓬左文庫本が原態をとどめており、しかも刷りがよい。なお、内閣本は『古典資料』の第七巻として、昭和四十五年十二月、朝倉治彦氏の解説を付して、すみや書房より影印刊行された。

元和三古活字版（以下元和版本）は、慶長版本によつたもので、刊行者は同じく「以時」であるが、そのまま覆刻されたのではなく、かなりの活字が取換えられている。この元和版本の項に編入

すべきは、『総目録』で「刊年不明」として掲出されている「仙台伊達家」本である。同書は現在、宮城県立図書館に所蔵される。新しく付加すべき本としては、佐賀県多久市立図書館蔵本がある。

寛永元年古活字版は、慶長版本（もしくは元和版本）によつたものだが、版を新しく起している。ところで、『総目録』未収録本に青山学院大学日本文学科蔵本があるが、この本には「栗田氏珍藏記」と「小汀氏蔵書」の二つの蔵書印が押されている。この二つの印記から、『総目録』に掲出された「栗田」文庫蔵本と「小汀利得」氏蔵本とは同一本であり、しかも青山学院大学日本文学科現蔵本がそれであることが判明する。

寛永九年整版本は、上記の古活字版を基に整版化されたものと思われるが、振りがなや読点が補入されている。『総目録』掲載本のうち、名古屋市立鶴舞図書館本は、戦災で焼失、「旧三井本居」とある本は、国文学研究資料館（史料館）現蔵本であろうと思われる。また、内閣文庫・慶応義塾大学・京都大学には、それぞれ二部所蔵されている。また、「刊年不明」本のうち、「岡山大池田」本、「国学院」本・「彰考館」本（二部）は、いずれも寛永九年版本であるところから、岡山大学図書館（池田文庫）・彰考館にも二部所蔵されていることになる。

寛永九年版本として追加すべきは、加賀市立図書館蔵聖藩文庫・和歌山大学真砂町分館蔵紀州藩文庫・岩国市立図書館（徴古館）・萩市立図書館・今治市河野信一記念文化館・武雄市教育委員会（武雄鍋島家本）・宮崎県高鍋町立図書館・笹川祥生氏、それに筆者架蔵本がある。本書は時折、古書目録にも掲載されるし、個人蔵も多いようである。

『総目録』に「刊年不明」として掲出されている「温古堂丸山文庫」本は、現所在不明である。丸山文庫蔵書中、郷土資料関係書は、長野県立図書館に移管されたが、一般書は散佚したとのことである（長野県立図書館御教示）。

以上の検証を基に、『明徳記』の伝本を整理すると、つぎのようになる。

写天理（上巻のみ）・島原（上巻のみ）・神宮・宮書・内閣（二

卷二冊）（一冊）（抄、軍記抜書の内）・大和文華館（二冊）・

彰考（新撰明徳記）・尊経（二冊）・陽明・旧青蓮院・旧長福
禅寺・加賀（寛永九年版写）

版慶長一古活字版——蓬左・内閣・大東急（中巻欠）・酒井
字吉

元和三古活字版——東大史料・茶図成實・延岡内藤家・仙台伊
達家・多久

寛永元古活字版——東洋岩崎・大東急・青山学院大（旧栗田・
旧小汀利得）

寛永九整版本——内閣（二部）・宮書・静嘉（二卷二冊）二部・

尊経・茶図成實・秋田・東北大野野・米沢興譲・筑波大・彰考・
東大・東大史料（二冊）・早大・慶大（二部）・国学院・豊橋・

刈谷・飯田・加賀・神宮・京都府・京大（二部）・陽明・関大・
岡山県・岡山大池田（二部）・栗田・九大・国文学資料館史料館
（旧三井）・海上自衛隊第一術科学校（旧海兵）・和歌山大紀州藩

・岩国市・萩市・河野信一文化館・武雄市教委 武雄鍋島家・高
鍋・笹川祥生・架蔵・旧鶴舞

刊年不明——旧丸山

以上の伝本の書誌を、以下に記す。記載の要領は、①函架番号②書写(刊行)年時③外題④内題⑤巻冊⑥表紙⑦寸法(タテ×ヨコ)⑧装丁⑨本文紙質⑩紙数⑪一面行数⑫見消・書入・貼紙⑬奥書等⑭蔵書印⑮表記⑯その他、である。なお、見返は本文共紙、「同筆」・「別筆」・「後筆」は本文筆蹟に対してであり、「原」は原態、「改」は後世の改修を意味する。また、内・外題および奥書などの字体は、現行活字体に改めた。

〔写本〕

(一) 天理図書館蔵本

①二一〇・四——イ六九②寛永ごろ③なし④明德記(端作)⑤上巻のみ一冊⑥黒茶色無地紙表紙⑦21.9×14.8⑧袋綴⑨斐箔交漉⑩遊紙なし、本文墨付34丁⑪7行⑫見消・書入ともにあり(墨書。同筆)⑬巻末に以下の本奥書あり「明德式年拾式月晦日敬白又書日」「大永七年霜月十三日 謹之 睿□王聖朝」⑭一丁表右下「天理図書館蔵」(長方形朱陽刻)。なお前表紙見返し中央に天理図書館の整理番号と受入日(昭和四十年四月三十日)とを記す朱印⑮カタカナ交り、一筆⑯本書の本文・本奥書は(一)の島原松平文庫本と同じ。但し、(二)本よりも誤写少し。なお、帙題簽(近代貼付)には「異本明德記 寛永頃写 大永七年奥書」とある。

(二) 島原公民館蔵松平文庫本

①一一四——四②江戸初期③左端上方に烏の子紙無地題簽「明德記」(別筆)④明德記上巻(端作)⑤上巻のみ一冊⑥薄茶色布目模様紙表紙⑦27.2×20.8⑧袋綴⑨楮紙⑩遊紙首・尾各1丁、本文墨付23丁⑪10行⑫墨書入・見消あり(別筆か)⑬天理図書館

蔵本本奥書と同じ。但し「聖朝」の「朝」が車扁⑭巻末左下隅「尚舎源忠房」(四周双辺長方形青陽刻)、その下「文庫」(楕円形朱陰刻)⑮カタカナ交り、一筆⑯天理本と祖本同じ。本書は「軍記と語り物」第十四号(昭和五十三年一月)に翻刻。

(三) 神宮文庫蔵本

①歴史——九二(特別本)②江戸初期③左端上方に打付書「明德記上(——下)」(三冊とも一筆。但し本文とは別筆)④明德記上(——下)(端作)⑤三卷三冊⑥丁字引紙表紙⑦26×20.8⑧袋綴⑨楮紙⑩遊紙各冊とも首のみ1丁(文庫で補修)、本文墨付上巻33丁、中巻37丁、下巻39丁⑪9行⑫朱書入一種、墨書入二種。このうち朱と墨書入の一種は同筆か⑬なし⑭一丁表右上隅「林崎文庫」(方形茶褐色陽刻)、右下「林崎文庫」(子持杵長方形朱陽刻)、巻末左下「天明四年甲辰八月吉旦奉納皇太神宮林崎文庫以期不朽京都勤思堂村井古巖敬義拜」(長方形朱陽刻)、その下「万福寺」(方形朱陽刻)⑮カタカナ交り、一筆⑯群書類従卷三七三所収本の原本。但し本書上巻には欠丁と錯簡あり。群書類従は欠丁は「印本」(寛永九年版本か)で補欠し、錯簡は訂正している。なお、上巻巻末に「印中方福寺トアリ」の墨書入あり(別筆)。

(四) 宮内庁書陵部蔵本

①五五八——一六三②室町末期③中央に朱色地に金泥絵模様入紙原題簽「明德記上(——下)」(同筆)④「明德記上(中・巻下)」(端作・尾題。但し尾題は「巻中」)⑤三卷三冊⑥紺色無地紙表紙⑦26.5×20.5⑧袋綴⑨楮紙厚紙⑩遊紙首尾とも各1丁。但し中巻のみ尾遊紙なし。本文墨付上巻31丁、中巻46丁、下巻36

丁⑩9行⑫なし⑬なし⑭各冊首遊紙「林景文庫」(長方形朱陽刻)、「伊佐早兼古書之宝」(長方形朱陽刻)、一丁表右上隅「圖書寮印」(方形朱陽刻)、右下「宝玲文庫」(長方形黒陽刻)⑮カタカナ交り、一筆⑯上巻首遊紙に「明德記ニ温井入道榮阿善心寺正範禪師」と書いた貼紙(別筆)、また帙内側に「古写本明德記三巻 右以刊本対読異同頗多在為草堂史料中之珍本宜護重大正四年乙卯秋九月伊佐早謙(朱陰刻)(朱陽刻)」の識語あり。本書は『跡見学園女子大学紀要』第十二号(昭和五十四年三月)に翻刻。

(五) 大和文華館蔵本

①鈴鹿文庫一——一六三〇②江戸中期③左上方に打付書「明德記上(下)」(同筆か)④なし⑤二巻二冊(但し本文的には流布本三巻と同じ)⑥浅葱色無地紙表紙⑦25.2×19.7⑧袋綴⑨楮紙。料紙中には金の切箔施しのもとと薄青色地のもとが混入⑩遊紙なし、本文墨付上巻57丁、下巻78丁⑪10行⑫墨書入あり(同筆)⑬なし⑭前表紙見返右下「尚□言蔵」(方形朱陽刻)、その左「大和文華館圖書之印」(方形朱陽刻)、一丁表右下「盛(奥か)□」(円形朱陽刻)、巻末左下「平杉原□□□」(長方形朱、平杉原)は陰刻、不明三文字は陽刻⑮ひらがな交り、一筆⑯ひらがな中心の表記。

(六) 内閣文庫蔵二冊本

①一六七——八六②江戸初期③左上方に打付書「明德記上(下)」(後筆)④「明德記」(端作・尾題)⑤二巻二冊⑥焦茶色無地紙表紙⑦24×17.5⑧袋綴⑨楮紙⑩遊紙上巻首にのみ1丁。本文墨付上巻37丁、下巻49丁⑪9行⑫朱見消と朱・墨書入あり。朱書は

同筆、墨書は別筆⑬なし⑭一丁表右上方より「浅草文庫」(子持梓長方形朱陽刻)、「和学講談所」(子持梓長方形朱陽刻)、中上「日本政府圖書」、左上「内閣文庫」(兩者ともに巻末にもあり)⑮カタカナ交り。上巻と下巻は別筆か。但し同時代書写。上巻の尾遊紙に「異本ニ」として10行に渡る書入、また下巻末にも三丁に渡る追而書あり。下巻の追而書は本文と同筆⑯上巻27丁裏に朱書で「以下中巻」の付箋あり。

(七) 内閣文庫蔵一冊本

①一六七——九三②江戸初期③左端に打付書「明德記全」(別筆か)④なし⑤一卷一冊⑥白茶無地紙表紙⑦28.5×21.1⑧袋綴⑨楮紙⑩遊紙なし、本文墨付94丁⑪8行⑫墨書入あり(同筆)⑬なし⑭一丁右より「浅草文庫」(四周双辺長方形朱陽刻)、「江雲渭樹」(「江・渭」は朱陰刻、「雲・樹」は朱陽刻)、「林氏蔵書」(方形朱陽刻)、「内閣文庫」(巻末にも)、「日本政府圖書」、巻末に「昌平坂学問所」(長方形黒陽刻)⑮ひらがな交り、一筆⑯林羅山旧蔵本。46丁表まで三巻本の上巻に相当、以下88丁表まで中巻に相当、以下下巻に相当するが、下巻相当部分は省略甚し。なお46丁表に「以上上巻」の付箋あり(後筆)。

(八) 彰考館蔵本

①丑部二三②元禄八年③左端上方に紙題簽「新撰明德記」(同筆)④「新撰明德記上」(端作。但し下巻はなし)⑤三巻一冊(但し中巻相当部分欠)⑥白茶無地に雲母引紙表紙⑦28.8×20.3⑧袋綴⑨楮紙⑩遊紙なし、本文墨付91丁⑪8行⑫朱見消・書入あり(同筆)⑬91丁裏に「右新撰明德記元禄乙亥之秋大申元善於京師獲遣道院所蔵本与印本比较良異因新写納館庫」と墨書した

付箋あり(同筆)。「元禄乙亥」は元禄八年(一六九五)⑭一丁表右下に「彰考館」(ふくべ形朱陽刻)⑮カタカナ交り、一筆⑯本書の祖本は⑰の書院部本と同系統本。

(九) 尊経閣文庫蔵本

①一八四——八九②江戸初期③左上方に打付書「明德記上(下)」(同筆)④なし⑤二卷二冊⑥裏葉色無地紙表紙⑦26.5×20.8袋綴⑧斐精交漉⑨本文墨付上卷74丁、下卷71丁⑩9行⑪朱の読点、墨書入あり(同筆)⑫なし⑬一丁表右上「字」(円形朱陽刻。加賀藩藩校印)、右下「石川県觀光博物館図書室印」(長方形朱陽刻)⑭ひらがな交り、一筆⑮寛永九年版本の写しか。本書は前田家三代微妙公利常が書写させた「手轉本」。利常は万治元年(一六五八)没。

(十) 陽明文庫蔵本

①メ——一四②文安五年四月③左上方に内疊紙題簽「明德記中(下)」(上巻剝落。同筆か)④「明德記第一(卷第二・三)」(尾題。端作はただ「第一(二・三)」のみ)⑤三卷三冊⑥紺色無地紙表紙⑦27.3×21.8袋綴⑧楮紙⑨遊紙首・尾各2丁、本文墨付上卷43丁、中卷62丁、下卷48丁⑩9行⑪朱・墨書入あり(墨書は同筆か)⑫上巻卷末に「本云 右本為末代記録御合戦ノ後日ニ承及ニ随註置之処号明德記諸方ニ書写ノ本在之短才愚慮之上卒爾之間詞ノツ、キ大方ノ文章余尔聞惡之間少々引直重注置者也此本ノ事人々進退入カトハ私ノ非所成之由方々兼テ存知候者歟併可蒙芳免哉 応永三年五月日 云」と、「本云 此本以作者自筆本令書写畢雖然定可有誤者也」の本奥書、中巻卷末に「本云 応永三年七月日 云」の本奥書、下巻後表紙見返に「文

安五^戌辰年四月中旬に急本暫時書之」の書写奥書あり(いずれも同筆)⑭上巻は前表紙見返中央、中・下巻は首遊紙中央に「陽明蔵」(横長朱陽刻)、各巻一丁表右上に「近衛蔵」(長方形朱陽刻)⑮ひらがな交り、一筆⑯本書は昭和十六年十二月富倉徳次郎氏によって岩波文庫に翻刻、また昭和五十二年六月には富倉氏の解説を付して「陽明叢書国書篇」第十輯に影印収載(思文閣出版)。

(十一) 青蓮院旧蔵本(尊経閣文庫蔵寛永九年整版本書入)

①三——四②下巻卷末に料紙を継足して識語あり。③右上下二巻校讎已竣蓋壬戌春仮青蓮院之旧本而読之大概雖同印本間亦有不同者且以茲両卷為上下每卷有永正十一年跋其書也紙墨古体而無贋書之疑然筆之者不知為何人故朱書其異於印本之傍遺之天和二年仲夏中一日」(墨書)。

丁変りで青蓮院本の奥書(同)転写「明德記卷第一跋 天下無双之悪筆他見之憚雖在之彼本年来所望之処去仁可然所持之間日数之逗留ニテ借用至如形書写候文句儀ハ往本処也落字失忽可在之候後見之人可有御直者也 但馬国七美郡射添庄田家村住人田中源次郎 永正十一年^甲戌卯月上旬五日印」、行変りで「又卷第二跋 天下無双之悪筆後見之憚雖不少候彼明德記連々ノ望ニ付而自用ニ書置処也落字失忽可在之候文言当字等者住本書写候也射添庄田家村住人田中源次郎 永正十一年^甲戌卯月上旬五日印」(朱書)。

丁変りで識語(一)「今茲壬戌之春借青蓮院之蔵書遂注其異今復与洛陽長福禪寺之旧本校讎而訂用藍色以別二本如院主之蔵書唯上中二卷而已為之上下今是本者存下卷而脱中卷蓋合他二本乃知

鑑本非贋矣 天和第二載仲秋下流」(墨書)。

丁変りて本奥書(「明德記上巻尾 宝徳式年五月十八日書之

伝領紹真(花押)」(又下巻尾 宝徳二年九月廿五日書之 伝

領紹真(花押)「朱書。但し(丙)の朱書とは色が異なる)。以上の(イ)

(乙)は一筆で、天和二年時のものと思われるが、ただ(丙)と(乙)は

親本を模したものであるう、書風が異っている。この青蓮院本

は(丙)の陽明本と同系統本。

(十二) 長福禪寺旧蔵本(尊経閣文庫蔵寛永九年整版本書入)

①(十一)参照⑬(十一)の⑬項(イ)参照。(イ)は本書の奥書と思

われる。なお、「長福禪寺」は、京都市右京区梅津中村町に現

存する臨済宗南禪寺派の「長福寺」であろう。同寺は、仁安三

年(一一六八)に「長福寺」として創建され、初めは天台宗で

あったが、暦応二年・延元四年(一一三九)、臨済宗に改宗。室

町時代には禪寺十刹の一つとして盛えた寺である。

〔版 本〕

(十三) 慶長十九年古活字版(蓬左文庫蔵本による)

①貴重図書一〇五——⑤慶長十九年九月③左端上方に楮紙題

簽「明德記上(中・下)」(改修)。④「明德記巻第上(巻中・巻

第下)「端作」「明德記巻上(中・第下)終」(尾題)。「版心」は

黒口「明德記巻上(中・下)」「丁付」⑤三巻三冊⑥白茶色無地

紙表紙(原か)⑦27.8×19。「本文匡郭四周双辺。21.8×16.5」上巻

一丁表内法計測)⑧袋綴⑨楮紙⑩遊紙なし、本文墨付上巻24

丁、中巻33丁、下巻26丁⑪11行⑫下巻23丁裏に青色の付箋に「

ン書きで「類従本ハ「袖ヲソヌラシケル」にて止む以下闕く」

と注記⑬下巻巻末に「今世好事者保元平治平家物語皆以費梓工

矣於是承久兵乱及明德記及応仁記不幸而免如予閑人幸而得之屢

為日之便時々以古本校訂之漸畢其功忽補其闕雖然不獲其全也庶

幾後人就有道而正焉而已」の跋文、三行分余白のち「于時慶

長第十九年無射望日 以時」の刊記⑭一丁表右上に「衛本」

(方形朱陽刻)⑮カタカナ交り⑯本書は以下の版本の祖型。な

お下巻丁付が八丁と九丁で順序誤り。

(十四) 元和三年古活字版(お茶の水図書館蔵成實堂文庫本によ

る)

①一四五二②元和三年十二月③左上方に楮紙題簽「明德記一

(二・三終)」(後筆)④慶長版本に同じ⑤三巻三冊⑥焦茶色無

地紙表紙⑦27.7×19。「本文匡郭四周単辺21.7×16.7」(上巻一丁

表内法計測)。「字高」21.8袋綴⑨楮紙⑩慶長版本に同じ⑪11行

⑫巻下に徳富蘇峰の識語挟込み。「大正三年十月五日偷閑訪各

堂惕然獲元和三年活字明德記三冊及同時代応仁記二冊焉是皆当

時印行之原本而彼紙題簽悉皆存本末之面目蓋活版旧板中之上駟

也乃欣然披毫其所由云尔 蘇峰主人 大正三月初七日」⑬跋

文は慶長版本に同じ。但し慶長本の「後人就」を「後就人」

とし、「而已」の「已」が慶長本では行末であったのを、次行の

頭に移し変えている。三行分余白のち「于時元和三年極月望

日 以時」の刊記⑭一丁表向上⑮野文庫(楕円形朱陽刻)、

右下「徳富氏珍藏記」(双郭長方形朱印。「徳富氏」は陰刻)、

「珍藏記」は陽刻)、上巻に「徳富氏図書記(方形朱陽刻)」を

挟み込む⑯カタカナ交り⑰慶長古活字版の覆刻だが、慶長本を

訂正したり、活字を植換えている。

(十五) 寛永元年古活字版(東洋岩崎文庫本による)

①三Ag——10②寛永元年五月③左端上方題簽剝落跡に打付書
「明德記上(中・下)」(一筆)④慶長版本と同じ⑤三卷三冊⑥
焦茶色無地紙表紙⑦ 28×19.7 。「本文匡郭」四周单边。 $22.5 \sim 22.6 \times$
 $17.2 \sim 17.3$ (上卷一丁表内法計測)⑧袋綴⑨楮紙厚紙⑩遊紙なし、
上卷21丁、中卷28丁、下卷22丁⑪13行⑫なし⑬慶長版本跋文に
同じ。刊記は「于時寛永元子歲仲夏下旬 開板□□」(註)⑭なし

⑮カタカナ交り⑯寛永九年整版本の親本。

(十六) 寛永九年整版本(架蔵本による)

②寛永九年十二月③子持梓楮紙原題簽 (15×3.2) 「明德記上(中)」
(下卷は剝落)④「明德記卷第上(中・下)」(端作)、「明德記
卷上(中・下)終」(尾題)。「版心」黒口「明德記上(中・下)
(丁付)」⑤三卷三冊⑥焦茶色無地紙原表紙⑦ 27.1×19.4 。「本文匡
郭」四周子持梓 $21.7 \sim 21.7 \times 16.7 \sim 16.8$ (上卷一丁表内法計測)⑧袋綴
⑨楮紙厚紙⑩遊紙なし、本文墨付上卷21丁、中卷29丁、下卷23
丁⑪12行⑫朱書入あり⑬跋文慶長版本と同じ。但し慶長本の
「辛」が「辛^{カサシ}」と変えられている。刊記「寛永九年壬申季冬吉
日刊行」⑭一丁表右上「結城家蔵」(方形朱陽刻。この印は上
巻のみに押印)、右下「結城家蔵」(方形朱陽刻)。両者は別種
印⑮カタカナ交り⑯本書は寛永元年版を基に、振りがなや読点
を加えて整版化したもの。